

農村地域の小学生の子どもをもつ世帯の住まい評価に関する研究

- 山形県飯豊町調査から -

昭和女大短大 ○ 瀬沼 頼子 日大農獣医 糸長 浩司

- 〈目的〉 典型的な農村地域である山形県飯豊町では、町民の定住化を促進するための施策が進められている。本研究は、このような地域を調査対象とし、町の将来を担う小学生とその保護者の若い世帯が、現在どのような住まい環境で生活し、何を望んでいるか等を、アンケート調査から明かにし、今後の農村地域の住まい環境整備や地域生活を考える際の手がかりを得ることを目的とする。
- 〈方法〉 1992年10月に、子どもを視点においた住まいを中心にした生活環境調査を実施した。調査は飯豊町企画課と飯豊町第一小学校の協力を得て、同小学校の6年生・3年生の児童及びその保護者を対象とし、調査内容は家族の住まい方や子どもの専有空間内での生活実態、居住環境等に関して行った。
- 〈結果〉 回収状況は、子ども130、保護者118であった。対象世帯の職業は、半数以上が専業か兼業農家であり、家族構成は5人以上が9割を占めている。住宅の延べ床面積は、37.5坪以上82.5坪未満が約8割である。子どもの専有空間所有状況は、一人部屋ときょうだい共有の部屋それぞれ43%である。飯豊町に対する親の評価は、「大変良い環境である」と「まあまあの環境である」を合わせ55%である。子どもが自分の家の良い点として挙げている項目は、「家の周辺に田圃や畑があること」が46.5%と最も多く、次いで、「庭があること」と「自分の部屋があること」が共に41.9%である。さらに、家の中でどの場所が好きかの質問では、6年生は第1が「自分の部屋」次いで「茶の間」を挙げ、3年生では第1が「茶の間」次に「自分の部屋」を挙げている。また、飯豊町に住み続けたいかの質問では、現在はまだ考えていない子どもが多いが、これを除いた6年生の7割、3年生の8割が「ずっと住みたい」と考えており、その理由として居住環境の良さを多くの者が挙げている。